

國學院大學學術情報リポジトリ

轉注小探：
段注のいくつかの互訓例から引伸について探る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大橋, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000794

轉注小探

—— 段注のいくつかの互訓例から引伸について探る ——

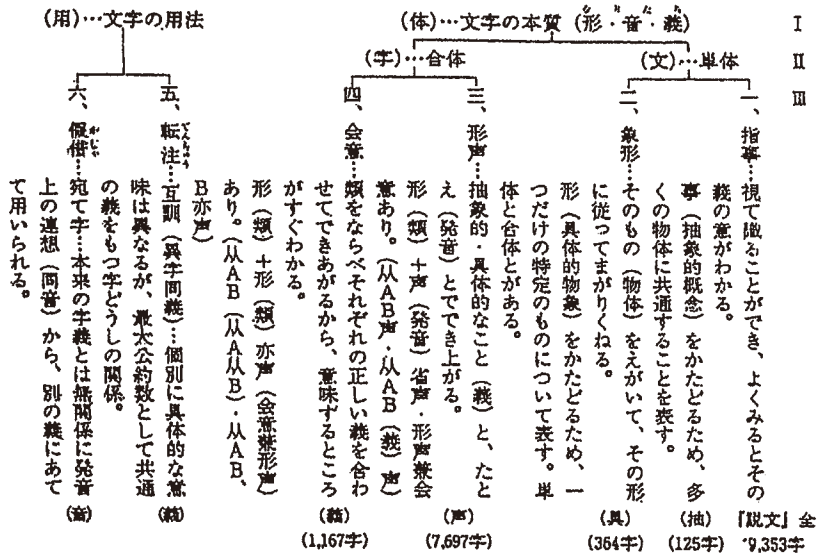
大橋由美

キーワード

段注（段玉裁『説文解字注』） 轉注 『爾雅』釋詁 「六書の図」

I. はじめに

段注によれば、六書とは「文字の造字と用法についての総合的な理論」といえる。これは許慎著『説文解字』（説文と略す）十五篇の序に端的に記されており、それを図式化すると次の「六書の図」となる。



「六書の図」

中国語では、表記言語として形をもつ漢字は、音と義を要素として備えもつ（漢字の三属性）。原則的には、一音節が一語つまり一つの言葉としての字義をもち、それが一字として形をもち表わされる。

ところが、今日、例えば一字であっても、複数の発音をもつことがあり、またいくつかの意味をもつような場合がある（その発音に相応しい字義が備わる場合もある）。これはかなり厄介なことであり、ゆえに造字の初めに担った一つのある字義から「引伸して」別の意味となる、ある意味で用いられる、としばしば字書類で記されることとなる。

段説に基づく「六書の図」によれば、「体」すなわち文字の構造（造字法）は、ある一つの構造法によって出来上がった文字が一つの基本である本来の字義をもつことを表し、「用」は、文字が造られてより用いられ続けているその使用法である。

説文には全てで九三三文字が収められるが、各文字は全て六書のうちの体である指事・象形・形声・会意のいずれかによって造られており、用は体の如何には関わらない。また、用としてみて、全ての文字が他のいずれかの文字と関係するという意の用法ではない。用は必要な場合に、その文字（相互間）に適応される。

用には、二つある。一つは字音に重点を置く假借（或いは仮借、同字異義・当て字）、もう一つは轉注（異字同義）すなわち互訓であると段氏はいう。

段注が説く轉注とは、師である戴震が「孔子がまた現れたとしても、変わらない」（『孟子字義疏證』）として説いた説を受け、序で述べたものである。

異字同義といい互訓といい、轉注は字義に関する用語で、二つ以上の文字同士に関わる用法である。段氏は、序で、轉注の代表例として『爾雅』「釋詁第一」の劈頭で「初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、俶、落、權、輿、始也」と以上の十三文字が全て「はじめ」と訓じられる条を挙げる。経書の一つに列せられる『爾雅』の時代より既にこの用法が備わっていたのであると力説する。ただ、この例から、逆は必ずしも成り立たず、さらに他の意味に用いられる場合はこの関係は当然成立しないことは明らかだが、注意を要することである。

また、この例を挙げて同訓を説く段氏だが、より重要な「具体的なハジメは異なる」ということを付け加える。例えば、初は「衣をハジメて裁つ」、哉は才^{サイ}の假借で「植物がハジメて芽を出す」、胎は「三か月目の胎児（人らしさを備えたヒトとして考えた場合のヒトのハジメ）」などである。これらは、字体が異なる＝造字法が異なる（所属部首が異なる）、ゆえに個別の字義をもち異なるが、最大公約数は「ハジメ」であるということである。このように大きな共通点をとらえ、所謂統言すれば「同じ（類）」と「いえるが、所謂析言し、小さな差異、部首に注目するなど話題に相応しく厳密に選んで用いると、表現手段として

は意味をよりの確に伝えられることになろう。用法として正しく効果的である。

以上から、文字は造字の初めは一義であったが、その一義を見る角度を変えると少し力点が移動し、移ったほうの義となるといえまいか。例えば、一つの円錐でも真正面から見ると三角形だが、底から見ると円であるように。よって、ある意味に関しては、轉注が成り立つということになる。

また、序で挙げられた例からは、轉注は狭く純粹の意味では字義に関するだけと受け取られがちだが、実は字音も関係する場合があることを段注は示唆する。段玉裁得意の古音説を駆使し説くのは假借についてであると一般には思われるが、実は轉注でも同じことがいえる。段説では用である轉注と假借には、互いに関係し合う複雑さがあることが想像され、体である造字法四種が相互に関連しあう場合もあることに似ている。ゆえに段氏がしばしば力説するように、許慎が説文に記してより様々な解釈がなされたが、永らく真意は理解されず、戴震の説を待たねばならなかった、ともいえよう。

字義・字音に特化して典型例・代表として分かり易い大原則を記し序で定義したのは、六書説全体をば二元論によって総括的に論じるためであったことは想像に難くない。しかし、個別の文字を検討すると、重点が体や用のいずれにあるゆえに、六書のどの一つとして代表させるかということになり、結果として説文の説解ででは造字法や字義が原則一つと定めて記されているかが明かになる。同様に用である轉注と假借についても、関係する個別の字を検討し、それが如何なる轉注・假借（の関係）にあるかということを具体的に見て、原則の妥当性や例外的であることなどを決していくことは、説文及び段注研究には重要であろう。

筆者は、これまでいくつかの助辞を取り上げ、轉注について考究してきた。助辞とは、文字の造字よりその用法に焦点を当てた文字といえるが、それゆえに、師説に従った段注に記された説により、多様な轉注の一面を知ることができると考える。また引伸というように、基本義から一体どのように引き伸びてその結果如何なる意味になるのか、その實際を段説によって具体的に探ることができよう。

よって、本小考では、助辞として「こいねがう」と訓じる庶（十一画）を中心に、段説によって関連付けられる尚・幾・微・殆・危・幸などを主として取り上げる。

凡例は、楷書で挙げた各字の所在を示し、先ず許慎説文の親字である小篆（篆文）を挙げ、次いで説解を示し、その説解ごとの段注を示す。右下のパーレン内は筆者注。また随時補説や参考となる関連することも示す。例えば、「庶 九下17a 小篆 ①屋下衆也。②从广艸…」は、「庶は段注九篇下17葉オモテにあり、段注の見出しは小篆で、①～③の説解がある」の意。以下は、段注で該当箇所①～③ごとに示し、補足で例証の原文とそれに対する見解など。

II. 段注の実例の検討

II-1. 九下17a 庶を中心に

庶 九下17a 庶

- ①建物のなかにひとがおおい。
- ②广⁽¹⁾と苙⁽²⁾とを構成成分として持つ(广の中に苙^カがある)。
- ③苙は古文の光字である。

段注

①諸家は皆すべて「庶、眾也」という⁽³⁾。許(慎)だけが独り「屋下眾(建物のなかにひとがおおい)」ということは、广(やね)をば構成成分としてもつからである。

(『爾雅』)「釈言」⁽⁴⁾は「庶、侈シ也」だが⁽⁵⁾、侈は鄭(玄)は箋では朧(シ・コル)に作り⁽⁶⁾、これは引伸の義である。

さらにまたこれを引伸して、「釈言」⁽⁴⁾は「庶、幸也」というが、『詩』(「檜風」)素冠の傳は同じだ⁽⁷⁾。

さらにまた「釈言」⁽⁴⁾に「庶幾、尚也(こいねがう)」⁽⁸⁾という。

②光は眾盛(おおいにさかん)の意だ。商署切(シヨと発音)。(私の古音説では)五部。

筆者補注

(1) 广 九下11a 广

「①因厂爲屋也②从厂(岩山のがけ)③象對刺高屋之形(向かい側の突き刺さるように高いやねの形に象る)⁽⁴⁾凡广之屬皆从广(凡そ广のなかまは皆て广を構成成分として持つ)。讀若儼然之儼(儼然というときの儼のように読む)」

①…今正す。厂とは、山の石の厓巖(ガケ)で、これに因って屋(ヤネ)と爲るが、是れが广というのだ。『廣韻』など…皆てが「因巖」に作るのは、證しとすることができ、「因巖」がほかならず^{つま}即り「因厂」である。…③刺は各本が^{ラツ}刺に作るが、今正す。(刺は)七亦切(セキ)と読み、對面(向かい側)で高い屋根が森のように聳えたち上に刺さるという意味である。首画は巖の上に屋があるさまに象る。④魚儼切(ゲンと発音)。八部。

(2) 苙 十上51b 光の或体 苙

段注は苙条で「庶字はこれに^{したが}从い會意」とのみいう。また「明也。从火在人上，光明意也。𠄎、古文。苙、古文。古皇切」と徐鉉『説文解字』(所謂大徐本)にあり、その注に「𠄎、本字。𠄎、𠄎、古文」とある。

(3) 大徐・小徐はともに許慎と同じだが、經書『爾雅』の最初である「積詁第一」では「庶、眾也」で（晋の郭璞注・宋の邢昺疏）、『詩』大雅・卷阿「既庶且多」の箋（後漢の鄭玄）、『国語』「鄭語」「以品處庶類者也」の注（呉の韋昭）も同じである。

また、「庶、眾也」とあるようなものを十三經注疏本の索引で確認したところ、『尚書』「周書」「洪範」以下21例で、これは朱駿聲『通訓定聲』の挙げるものに同じで、『爾雅』の疏に「『詩』に見える」という例にほぼ同じであるが、「小雅・楚茨」に「彫多也」、『儀禮』「大射」に「羞謂臙肝豕狗臠醢也」と後に関係する注がみえる。しかし鄭玄は「眾也」とするのが一般であることがわかり、「おおい」意が基本で主であるとは判明する。

段注は、眾（八上45b）は、「①多也。从从目。眾意（おおい。从と目に从い（3人の目）、おおくのひとの意）」に「①之仲切（シュウと発音）。九部。古くは平聲だった。」という。しかし、段氏は違う例を挙げ、あたかも自説を展開し、次の「肥える（脂がおおい）」に結び付け、引いては助辞「ねがう」に続かせたいように見えないだろうか（後注(4)参照）。

(4) この条では論拠としての『爾雅』は段氏が言及するだけで3件あるが、「庶」について言えば4件見える。「積詁第一」と「積言第二」は、時代が隔たりわからなくなった文字（古いことば）を今に通じさせるべく解釈したものと共にいえる。だが、「積詁」は最初に置かれたので、例からして一書としての特徴（ことばの古い意味を解釈する）がより表れており、積言は特に字体は同じでも古いことばで雅語や俗語であったものを後世にわかるように解釈したものと見えよう。よって、段氏は「積詁第一（下）」にある「眾」は本義と考えるが、直接には触れず（諸家の説の一つとする）、「積言第二」の3件を引伸義として挙げるのであろう。

しかし、「積言」内の引用の順からも「侈」は第一段階の、「幸」は第2段階の更なる引伸義と明らかに考え、「積言」で最初に出る「尚（求める・ねがう）」の義は「侈」の引伸とは異なると考えているように見える。ただ、段氏が注でいふべきと考えたもう一つの義「庶幾、尚也」を導き、かつ前の引伸義「おおい」と繋ぐためには、「積言」の2番目の「庶、幸也」を前に段注に出さねばならないから、引用の順番は考えられた上でのことと考えられる（後注(8)－①参照）。

『爾雅』の例は掲載順には以下の通りである。

1. 庶幾、尚也。詩曰「不尚息焉」

〔疏〕 庶幾尚也○釋曰尚謂心所希望也。注詩曰不尚息焉者、小雅菀柳篇文也。鄭箋云尚庶幾也。以心所念。尚即是庶幾、義相反覆故引之。

解釈するというには、尚は心が希望する対象であるという意味である。（上の郭璞）注に「不尚息焉」というのは、小雅「菀柳」篇の文であり、鄭玄が箋で「尚、庶は幾であ

る。心で以って念^{ネガウ}尚う対象である」というが、つまりまさに「庶幾」であり、意味は互いに反って覆いあうので、故にこれを引いたのだ。

2. 「庶侈也」と「庶幸也」は続いており、晉の郭璞注と宋の邢昺疏とは続けて解釈する。

庶、侈也。庶者、眾多為奢侈、庶、幸也。庶幾、僥倖。

庶は侈である。庶とは衆^{シヨ}材^{シユウ}で、多^タは奢侈^{シヤシ}だ。庶は幸である。庶幾は僥倖^{ネガウ}(求める)である。

[疏] 庶侈也庶幸也○釋曰富庶者多奢侈。郭云庶者眾多為奢侈。書曰祿不期侈庶、又為幸望。郭云庶幾僥倖。僥者求見親御也。幸與倖通用之。

解釈していうには、富^{トシヨ}庶^タとは多^{シヤシ}で、奢侈^{シユウタ}だ。郭璞は「庶とは衆多^{シユウタ}で奢侈^{シヤシ}だ」という。

『書』に「祿不期侈庶(祿は期せずして侈庶)」という。さらにまた幸望^{ネガウ}と為す。郭が「庶幾僥倖」^{ネガウ}というのについては、相手の親であるかたにお目にかかることを求めるのである。幸と倖とは通じて用いる。

3. 黎庶 烝多醜師旅眾也。皆見詩(前出)

(5) 十三經注疏本は阮元(1764-1849)が主としてその最も經學に通じた自説を中心に編んだものであるが、その校勘記には編集者として名が挙がらない段氏の説をしばしば引くことは既に指摘されている通りであり、筆者もこのことを度々指摘してきた。しかし、段氏は、各テキストの表記を自説によって校訂したものによって、一貫した説を展開するため、その説が通行の阮元注疏本・校勘記に記されていない場合が極めてしばしばである。段氏が段注著述に用いた諸版本を探ることは興味深いことではあるが、阮氏と異なる版本に依ったということであるゆえに一般に目にするには難しいと思われる。しかし、その根拠を他書に求め難くとも論じられたことがらは一貫しているのは明白であるため、その論の根拠や齟齬がないか・矛盾はないかということなどは、段氏自身の説を以って追求することが十分に可能であり、何より重要である。よって、本小考においても、探し当てられない根拠は多いが、その場合はいまは追求せず、段氏の説をもとに段氏の説を考えることを最重要基本方針とすることを先ずお断りする。

さて、侈の段注は、古の本義は、「廣大」「おおきい」「おおい」であるから「移袂」であるべきと段氏は主張する。十三經注疏本の校勘記も段説を引き、「移」が正しいとする。

(5) -① 侈 八上30a 侈

「①掩脅也(おおっておびやかす)。②从人多聲(人を構成成分として持ち多^タがその発音)③一日奢泰也(一説に「おごる」意であるという)」

①掩とは何かの上を掩蓋する(したからおおう)であり、脅とは何かの旁^{カタワラ}を脅制する(おさえつける)である。凡そ自多以陵人(多勢でもって上からおおいかぶさり人を下に押し

付ける)は侈というから、これは侈の本義である。(『国語』「呉語」に「夾溝而彫我」とあるが、その字がほかでもなくつまりは彫であり、その義がほかでもなくつまり掩脅である。

②尺氏切(シと発音)。古音は17部に在る(反切下字からすると段氏の16部となるからこういう)。

③泰字は『(古今)韻會(舉要)』(四紙韻)本に依って補う。奢とは、「張る」である。凡そ傳で「汰侈(ゆったりとおおきい)」というのはつまり許慎の書(『説文解字』)の泰の字である。(『詩』「小雅」(巷伯)に「侈兮侈兮(大きく口を張り広げる)」というのは上の義(本義)とは別である。今は上の義が廢れてこの義だけが独り行われている。三禮(周禮・儀禮・禮記)では皆て移を假りて侈とする(例えば『儀禮』「少牢饋食禮」の「主婦被錫衣移袂(主婦は錫を被り移袂を衣る)」など。十三經注疏本の校勘記では段説「段玉裁云釋文當云移袂。本又作侈、後人倒之耳(「釈文は当然「移袂」というべきだ。あるテキストではさらにまた「侈」に作るが、(これは)後の人が顛倒しただけだ)」を引く。『周禮漢讀考』では特にいわない)。

(6)説文には見えない字である。『詩經』小雅・楚茨「為豆孔庶」の箋が彫(肥える)とある。また「彫又作侈」とあり、「肥える」で通用することがわかる。ここでは、多聲をもち意味がさらに伸び進むようで、「こえる・おおきくなる」と繋がる。『詩經』小雅・楚茨「為豆孔庶」には、

君婦莫莫為豆孔庶為賓為客莫莫言清靜而敬至也。豆謂肉羞庶羞也

「釋而賓尸及賓客」箋云、君婦謂后也。凡適妻稱君婦、事舅姑之稱也。庶、彫也。祭祀之禮、后夫人主共籩豆、必取肉物肥彫美者也。

とあり、その校勘記には、

○莫音麥、內羞如字。內羞房中之羞、或作肉羞非也。適音的、稱尺證反。彫字又作侈、昌紙反。何沈都可反、共亦作供、音恭。…

とある。

(7)―①『詩』国風・素冠

「庶見素冠兮、棘人欒欒兮(私は逢いたい白い冠着けたあの人、喪にやつれた面影よ)」の毛傳には「庶、幸也」とあり、疏に「幸望得見服、既練之素冠兮」とあって、「幸望」を以ってつまり「そうあってほしいとねがう」と説く。

庶見素冠兮、棘人欒欒兮、庶、幸也。素冠、練冠也。棘、急也。欒欒、瘠貌。箋云、喪礼既祥祭而縞冠素紕、時人皆解緩、無三年之恩、於其父母而廢其喪礼、故覲幸一見素冠、急於哀感之人形貌、欒欒然、瘦瘠也。○…[疏]庶見至傳傳兮○毛以為時人

不能行三年之喪、亦有練後即除服者、故君子言已幸望得見服既練之素冠兮用情急於哀感之人…

(7)―② 幸 (十下9a) 傘

「①吉而免凶也 (めでたいことに死ぬわざわいから免れる) ②从兂、从夭 (兂カヲを構成成分としてもち、夭ワヅニルを構成成分として持つ) ③夭、死之事 (夭は、死ぬということだ) ④死謂之不幸 (死ぬことが不幸という意味だ)」

①吉とは、「善也 (よい)」である。凶とは、「悪也 (吉の反対の意)」である。悪を免れることができることがまさに幸であるとする。

②兂とは「不順 (したがわない)」である。夭^{わか}くして死ぬ事に順わないのを構成成分とするので、会意だ。胡耿切 (コウと発音)。十一部。

③ (「夭」で一旦ポーズを置き切れる) 『左傳』の所謂「(「民不夭札」の) 夭札 (わかじに)」で、その天寿を終えない者である。

④ 『(古今) 韻會 (舉要)』 (二十三梗韻) 本に依る。死が不幸であるとする、その場合はつまり死を免れれば幸となる。

この『左傳』の所謂「夭札」とは、襄公三十一年 (注に「夭札謂人死 (夭札は人が死ぬといういみである) 」) とある) と昭公四年にある。昭公四年は以下の如くで、より吉を感じる後者が幸と不幸 (凶) を論じるこの段注では相応しいであろう。

民不夭札短折為夭、夭死為札

○札、側八反 (サツ)。一音截 (セツ)、字林作壯列反 (セツ)

[疏] 注短折至為札○正義曰、「洪範」六極一曰凶短折。孔安國曰、短未六十折未三十、是短折為少夭之名也。『周禮』膳夫大札則不舉。鄭玄云、夭札、疫癘也。謂遭疫癘而夭死也。癘疾謂民病、夭札謂人死、故云夭死為札。

(8)―① 庶幾で「心が希望する」意を表す。

『爾雅』「釈言第二」「庶幾、尚也。詩曰「不尚息焉」」の詳細は注(4)参照。

(8)―② 尚は、詳細は筆者の別稿 (2008讀段注助辞ノート (四)) を参照されたい。

尚 二上2a 尚「①曾也。②庶幾也。③从八④向聲」

①尚^{シヨウ}の𠄎 (助辞) も亦た同じように舒^{ジョ} (のびゆく) であるから、故に尚を解釈して曾^{ソウ}と為る。曾は、「重也 (かさなる)」であり、尚^{シヨウ}は上 (のぼる) であるから、皆に積み^{かさ}なり高さが加わる意であるから、義も亦た相^まいに通じるのである。

② (『爾雅』「釋言」に「庶幾、尚也 (心が希望する)」という。

③亦た同じく氣が分散するさまに象る。

④時亮切 (シヨウと発音)。十部。

II-2. 段説の論拠としての各例の検討

Iで庶の説文及びそこで展開される段説について、行論の根拠を追って検討し、段氏の基本的な考えをみた。その結果、説文の説解がいう基本義「おおい」から、段氏は意味の広がりや段階的に述べていることは明らかとなった。ここで、基本義「おおきい」がどのように展開、つまり引伸していったか、検討してみる。

II-2-1. 「おおい」

II-2-1-1. 「多」系の「おおい」から「廣大」へ

A 移と関連するものに移・移がある。庶の段注から、古の本義は、「廣大」「おおきい」「おおい」と考えているゆえ、関連するこれらの字義に関わる共通例については、「移袂」であるべきと段氏は考えている。これについて十三經注疏本の校勘記が段説を引き、「移」が正しいとする。

さらに段氏は音韻的な問題では、『儀禮』（第十六少牢饋食禮）・『禮記』『表記』・『周禮』『天官冢宰 内服司』において、一貫して、多を聲符として、意符（義符）は、人偏でなく禾であるべきとし、字義は「おおい」とする。以下、2つの段注を挙げ補足する。

A-① 移 八上59b 移

「①衣張也②从衣多聲③春秋傳曰……」

①張は、『玉篇』・『廣韻』は皆に長に作るが、非だ。按えるに、^{かんが}移の^シの発音と意味とを一語でいえば^シ多である。經典では罕に^シ移字を用いるのであり、多くは移に作ったり^シ移に作ったりする。（『禮記』『表記』で「衣服以移之」といい、その（鄭玄）注に「讀如禾汜移之移、猶廣大（いねがはびこるように生い茂るといふときの「移」のように読み、その意はちょうど「廣大」というようだ）」という。（また『周禮』の注に「大夫已上移袂」（「内司服」か？段氏のいうような「大夫已上……」は見当たらないが、「少牢主婦髮鬢衣移袂」の注に「婦髮鬢衣移袂」、少牢主「婦髮鬢衣移袂」、閩監毛本作移袂、下仍作移。按少牢饋食禮釋文移袂本又作移……とある）といい、（『儀禮』『牢饋食禮』が「主婦被錫衣移袂」という注では「移者、半士妻之袂以益之（十三經注疏本では「移者蓋半士妻之袂以益之衣三尺三寸）」という。

②尺氏切（シと発音）。古音は17部に在る（反切下字が段氏16部であるからこういう）。

このように、段氏は、「ころもが張（りひろが）る」意であれば、衣を部首とすべきだが、この字が古典にまれにしか見えず、禾偏や人偏につくる事実・証拠を先ず述べ、ゆえに禾偏や人偏であっても「(はり)ひろがる」意であることを示す。「おおい」と「ひろがる・おおきい」が結びつく。

A-② 移 七上44a 𠄎

「①禾相倚移也(いねが互いに寄り合う)②从禾多聲(禾を構成成分として持ち多々がその発音)③一曰禾名(一説にいねの名という)」

①「相倚移」とは、ちょうど虚ろで従順に関係するというようなことで、『呂氏春秋』(士容論第六辯土)に「苗、其弱也、欲孤。其長也、欲相與俱。其熟也、欲相扶(苗は、幼く弱ければ孤りでしようとする。生長すれば誰か相手と俱にしようとする。成熟すれば誰か相手を助けようとする)」とあるからだ。

「倚移(たよりにする)」は連縣字で、疊韻で、「阿那(しなやか・しげる)」のように読む。『周禮』「攷工記」の鄭司農注では兩度「倚移從風」を引く(車有六等之數・弓人)が、今(司馬相如)「上林賦」では「旖旎從風」に作る。『說文』では禾部では「倚移」といい、旗部では「旖旎」といい、木部では「旖旎」というが、皆「阿那」という意味である。『詩』「檜風 隰有萋楚)毛傳では「猗儺、柔順也。猗儺即阿那(猗儺は柔順なさまだ。猗儺はほかでもなく即り阿那だ)」という。『禮記』「表記」の「衣服以移之」では「移讀如禾汜移之移、移猶廣大也。禾汜移蓋謂禾蕃多。(移は「禾汜移」というときの移のように読み、移はちょうど廣大というようなことである。「禾汜移」とは蓋ん禾が蕃り多いという意味だ。)」と注する。『禮記』「郊特牲」の「其蜡乃通以移民也」で鄭は「移之言羨也(移の発音と意味とをひと言でいえば羨ギルである)」といい、古くは移を𠄎りて𠄎と爲した。「攷工記」の「飾車欲𠄎(車を飾るのに過度でありたい)」が故書では𠄎は移と爲し、「少牢饋食禮」の「移袂(袂を移げる)」のようなものが皆て是れである。

(また)今人は但だ「遷移」(の移・ウツ)と読みかえるだけだが、『說文』に據る場合には則り此より彼らへ之く場合の字は当然「𠄎」に作るべきである。

②弋支切(イと発音)。古音は十六部に在る。

③ほかの義だ。

以上から、移は說文では単独では用いず基本字義は「(たよりにして)寄る」のようで、同様なことは何がそうするかによって部首が異なる連綿字があることをいわざるを得ない。その上で単独で用いた場合(これが原則)は、上で述べたように人偏の字と通じ「おおきくひろい」意となることへと導く。この意を含む連縣字の阿那でまず説く点は見事というべきである。「たよる」が「多い」に自然とつづく。ただ、多聲であっても全てがこの類と簡単なことではなく、やはり「うつる」意をもつ𠄎(之功を部首とする)もあることを付け加える。以上から、「おおきい」は、「ひろい」へと繋がったとみえる。

II-2-1-2. 多「おおい」

上述のように、聲符多が単に発音だけを表すための要素ではなく、「おおい」という意味をも生かしたものであることがわかる。これは、説文中には見えない（許慎が序で説かない）が、体の重要な造字法の一つとして段氏が序や段注内で補足する所謂「形声包会意」であり、「会意包形声」と対をなす考え方である。「六書の図」に示したように、聲符は発音の要素だけでなく意味も造字に関わったと、自身の音韻説から説くものである。聲符多に衣や禾が意符として付く諧聲符多系は、多は段氏17部で、その諧聲系列の文字群は16部及び17部に配されている（16部の場合は古音とされる）。隣り合う部どおしであるから、最も近い合音といえる。

さて、そもそも、多字それ自体、多を重ね、「おおい」ものであることは明らか過ぎることであるが、説文の多（七上29a）及び説解にいう字義である繻（十三上25a）について、段注が考える基本義をみってみる。

B—① 多 𠂔

「①繻也②从繻夕③夕者、相繹也。故爲多④繻夕爲多。繻日爲疊。凡多之屬皆从多」

①繻とは、「増益也（ます）」である。故に多（おおい）と爲る。多いものは少いものに勝る。故に引伸して勝の僞いいかたと爲る。戦功は多といい、人に勝ると言う（のがそれである）。

②會意。得何切（夕と発音）。十七部。

③相繹とは、相たがいに窮り無いまで引きあうである。絲を抽ひきだすのは繹という（のがそれである）。夕（𠂔・祥易切 段氏5部入聲）・繹（𠂔・羊益切 段氏5部入聲）は（共に入聲で）疊韻だ。夕を重ねたものに従う意を説く。

B—② 繻 十三上25a 繻

「①増益也②从糸、重聲」

①増益ますことは繻という。經傳では統一的に重かを段すりてこれと爲るが、字の本来の用法ではない。例えば『易』で重は、象傳では「重巽」（「巽下巽上」である巽卦）といい、さらに又（乾卦象傳）「洊雷震 … 習坎 … 明兩作離、兼山艮、麗澤兌」というが、皆すべて繻ますといういみである。今はといえば則り重つまが行われて繻まは廢れてしまった。増益せばその場合は則り加重する。故に其の字（形）は重に従う。許書（『説文解字』）では「重文若干（各部首末に記される所謂異体字がいくつ）」は皆て當然「繻文」に作るべきである。

②直容切（チョウと発音）。九部。

ここで引く『易』巽卦は「䷸巽下巽上。巽小亨、全以巽為德、是以小亨也。上下皆巽、

不違其令命、乃行也。…」である。なお、重は𧯛の聲符であるから、当然假借といえる。

以上から、「多」自体が「かさなる」ことで造られており「おおい」を基本義とするその上で、「かさなる」が「ます」に繋がった。「形声包会意」を用いると、聲符を多とし肉づきを意符とする既述した(6) 𧯛「(あぶらが) おおい」と関係が結ばれたといえる。

II-2-2. 「ねがう」

「おおい」が「おおきい」「ひろい」に引伸するに比して、「ねがう」まで至るとするのは興味深いことである。以下、段説の展開を追う。

II-2-2-1. 「わかじにする」から「ねがう」へ

既に『左傳』の所謂「夭札」について述べたが、『左傳』では、「夭は短折(伸びきらずに折れる)、夭死(全うせずに死ぬ)が夭札」というので、夭だけでは意が合わないので、夭札という。

さて、幸とは、段注がいうように、真に惜しんでも惜しみきれない「わかじに」だけでなく、(誰も免れない)死を免れるならば、一般にはこれ以上の「さいわい」(ねがい)はないであろう。ゆえに、今日でさえもそういうことは人の仕業としては不可能であろうし殆どないことと思われる。寧ろ「かすか」とい「すくない」といい、「おおい」とは全く反対の意味が思われるが、こういった考え方に重心が移り伸びて、別義が生じたのであろうか。

「おおい」とは、多様なことにいえることである。文字が造られた時代にも、折々に「おおい」と感じ、何がそうであるかによって、その範疇を具体的に表す部首を付した「おおい」義を持つ文字(群)が造られたと考えることは、これまでの例を見ても想像するにさほど困難は覚えないうであろう。

このように、古の人々は、いわば豊かな感性で多様な「おおい」を感じたであろうが、この感性ゆえにまた敏感にそれに対する否定的な感情も抱いたのではないだろうか？すなわち「すくない」という意識も同じように自然に多彩に感じたのではないだろうか。

あくまで文字がいつどのように造られたか、と考えると同様に、確たるものはなく推量に過ぎぬことばかりであるが、そもそも文字は古えの人々の素直な自由な広がりを許す心が造りだしたと深く信じるのみである。

なお、「庶幾」については、『爾雅』にあるのみで、これまでの例では言及されない。「一日(別説)」とないので、別義として考えていないのかもしれない。依然として気にかかるところではある。また、否定的なニュアンスの助辞については、拙稿(「助字ノート(一)」

2008など)を参照されたい。

II-2-2-2. 「ねがう」から「おおい」、「かさなる」、「ます」

「わかじにする」ことがなく祈るのが幸う(さいわい)とみて、これが「おおい」などに伸び行くさまをみよう。

先ず、尚によって、段氏が言うように「重也」は説解にはないが、曾は「重也(かさなる)」と結びつき、段注で「積み重なる=増す」意と説き、「おおい」に繋がる。

凡そ説文の文字の配列は字義の関連によるが(序)、尚の直前二上2bに曾がある。曾の段注によって、語気に重点がある乃に、更に則と「すなわち」へ繋がることになる。なお、曾が「嘗」でもあることは「高い(尚・かさなりおおい)」とは関係しても、語気であるとは見なしていない点で、論の焦点は移ったと思われる。

C-① 曾 二上2b 曾

「①晷之舒也(晷がのびゆく)。②从八、从日(ハワカレヒカガルを構成成分としてもち、日クヲを構成成分としてもつ)③四聲(四がその発音)」

①日部に「替、曾也」という。『詩』(大雅 生民・民勞)の「替不畏明、胡替莫懲」で(ともに漢代の)毛(亨)、鄭(玄)は皆に「替、曾也」という。

(さて私が)按えるに、曾の意味と発音をひと言でいえば「乃」である。…皆てみな訓んで乃と為るので則りは語気に合うのだ。(なぜなら後漢の)趙(岐)が『孟子』に注して「何曾猶何乃也」というのがそれで、是に替をば以って訓んで曾と為るのである。(よって)「替不畏明也」とは、「乃不畏明也」である。

(だが梁の)皇侃は『論語』(為政)疏(『論語集解義疏』)で「曾猶嘗也。(中略)嘗是以爲孝乎」という。(これでは)絶えて語気ではない。蓋ん曾字は古くは乃と訓み、子登切(ソウと発音、精母)だったろう。(しかし)後世には用いて曾經(カフ、過ぎ去った)の義と爲し、才登切(ソウと発音、従母)讀むが、此れは今義今音で、古義古音ではないのである。曾祖・曾孫のようなものに至っては、増益層衆(つけくわえてかさねる)の意を取り採用したので、則り曾・層に皆に讀むことができることになった。

②从八者(八を構成成分として持つ)とは、亦た同様に氣が分散するさまに象る。

③四とは、囟の古文で、囟は九部に在るので、此こでは合韻の理である。昨稜切(ソウと発音。稜は魯登切)。六部。「昨(従母)」は當然「作(精母)」に爲るべきだ。

段注のように確かに、梁・皇侃撰『論語集解義疏』には、「曾猶嘗也、言爲人子弟先勞後食、此乃是人子人弟之常事也、最易處耳、誰嘗謂此爲孝乎、言非孝也、故江熙稱、或曰、勞役居前、酒食處後、人子之常事、未足稱孝也」とあり、助辞の用法としての「す

なわち (何かと「等しい関係が成り立つ」) でなく、「そういうことがあった (過去の経験)」とのみ解している。なお、「すなわち」と訓じる助辞については、拙稿 (2012 同「助辞ノート (七)」) を参照されたい。

C-② 嘗 五上28a 嘗

「①口味之也。②从旨。尙聲」

①引伸凡經過者爲嘗 (引伸して凡そ過ぎ去ったということは嘗と為、未だ過ぎ去っていないことは未嘗と爲る。

②市羊切 (ショウと発音)。十部

これから、段説では意味上は関連があるが、曾6と嘗10 (市羊切 平聲 陽韻 第22小韻三等 C2類開口 禪三母) とは合音とはならず (所謂戴震の合音説にも合わない)、音韻上は関連はない。

C-③ 層 八上73a 層は、「かさなる」である。

「①重屋也 (重なった屋根)。②从尸。曾聲」

①曾の発音と意味をあらわすひとことではいえば重である。曾祖、曾孫が皆て是れ (例) である。故に曾に^{したが}層は重屋と爲る。 (『周禮』) 考工記 (匠人) の「四阿重屋」では、 (鄭玄は) 注して「重屋、複竿也 (屋根下地をかさねる)」という。後人はこれに因り (この意味の文字を) 樓に作る。木部では樓は「重屋也」という。引伸して凡そ重疊 (かさねる) の稱と爲る。古くは亦た増を假りてこれと爲た。

②昨稜切 (ソウと発音)。六部

以下のように段注が引く『周禮』「冬官考工記」は鄭玄の説に依ったことが明らかである。

殷人重屋堂 脩七尋堂崇三尺四阿重屋 (注) 重屋複竿也

[疏] 注重屋至竿也○釋曰云…云四阿若今四柱屋者燕禮云設洗當東霽則此 四阿四霽者也云重複竿也者若明堂位云、復廟重檐屋、鄭注云重檐重承壁材也。則此復竿亦重承壁材故謂之重屋

曾の段注では、乃のこのことのみ触れたが、層においてその字義から明らかに諧聲符である曾と関連すると考えて「形声包会意」の理論を用い、「曾之言重也。…故从曾之層爲重屋。…引伸爲凡重疊之稱。古亦假増爲之」と、「かさなる・ます」のみを説く。このことから、段注が説く説としては、曾には二系統あり、その一つが「ます (おおきくなる。おおきい)」系と考えられる。

ここで曾系の音的要素について段説をまとめる。まず、曾系は『廣韻』では下平韻17登韻にはほぼ全て見え、以下のように注がある (() 内は注)。

代表字増 増（益也。加也。重也。又埋幣曰増。作滕切。十二）

曾（則也。亦姓。曾參之後、漢有尚書曾偉。古作曾。又音層）

椽も同じく17登韻で、小韻代表字は^{ロウ}椽である。

椽（四方木也。魯登切。六。 椽上同。又威椽。又椽椽木也。）

層（重屋也。昨椽切。又作滕切。三） 曾（經也。又作滕切）

韻母つまり部としては合音の範囲内と考えられる（聞こえとしては同じ意味になる）が、以下のように頭子音が異なり、合わないために、当然正すべきとなる。

子、即里切 上聲 止韻 第17小韻 三等 C2類 精母

才=裁、昨哉切 平聲 咍韻 第6小韻 一等開口 從母

Ⅲ. おわりに

段氏が、許慎が説文の説解で説く基本義から、それがどのように引伸し発展して、別義を獲得し、時に寧ろ段氏当時の1700年代にはその発展した字義で用いられていたかについて、わずかに1例のみの段説をもとにみてみた。

庶は、本義は「おい」である。段注は論を展開する中で、「おい」が、「おごる・ひろい」→「(ゆるされる) さいわい」となり、ゆえにまた「ねがう」となったことに「引伸して」と付して忘れずに言及する。説文の注釈としてのみならず、字書の解説としてみても重要な指摘である。一般に庶が助辞とみなされているのだが、段氏は助辞とは、何の関係もないところから生じるものではなく、本義をどのようにかして関係をもったまま、用法として出来上がるものだと考えているように思う。

さて、本稿における引伸は、前向きで積極的なこころの動きと端的にいえまいか。

「ねがう」も絶望しない点で、同様に思われるが、しかし特に人が避けられない死に向かえば、死なずに済むことは、難しいことである。そう思えば一転し、ねがう→「少ない」→「否定的（なことば）」と心が向うだろう。「ねがう」と訓まれる「庶幾」には幾というやや否定的なことばが含まれるが、目下十分には分からない。二音節語が一音節の本来の意味とは異なり、特別な意味をもつことを理解することは極めて難しいが、興味あることである。今後の課題としたい。

さて、総じて、このように段説からすれば字義変化・変転すると推察するのであるが、段氏のその根拠は少なくとも古音説に求められることは明らかにみえる。大局的に言えば、段氏の「同音（或いは近似の音）は同義（或いは近い義）」で、段氏もこの説に適うように自らの音韻説も駆使して、文字の異同に努め意味のまとまりある文字群を定めてきた。

今本稿で取り上げた文字の意味を中心に段氏の古音部（反切）をまとめて示すと以下のようになる（（ ）内は反切）。

庶：眾（おおい・おおきい）、5（商署）→侈17
 →幸11
 （→幾15）
 →尚10

眾：多、9（之仲）

①侈：張広がる・大、17（尺氏）=衣+多

移：広大、16（弋支）

多：重、17（得何）

鍾：増重、9（直容）

②尚：かさなる、10（時亮）

嘗：あじわう→かつて（そうしたことがある）、10（市羊）

曾：乃→重、6（昨梭）

乃：矯めて曳く、1（奴亥）…替：乃、7（七感）…憚：痛い、7

層：重、6（昨梭）

③幸：免れる、11（胡耿）

以上のことから、「おおきい」は系統的にそれなりに共通する音的な要素を持つ。合音といえる要因があり、音の聞こえとして共通の意味があるといえよう。しかし、例えば6「かさなる」でありながら助辞で語気を表す乃1（すなわち）につながり、その意味とすれば「おおきい」とは途絶える。このような文字や韻との結びつきが見える。しかし、極めて簡単にいえば、「おおい」ことが最も根本的な考えかたの一つとしてあって、それが如何に「おおい」かをじっくりみて、じっくり考えてゆくと、かさなって「おおい」、ひろがって「おおきく」で「たくさん」あるようであって、「ます」へと繋がるようだ。

そして、「おおい」という積極的に思える感情が、望ましいと思ひへと繋がるのは、想像するとしてもさほどに困難や無理があるようには感じないのではないか。

また、「ねがう」ことが、「すくない」に関連する文字群と繋がるようにみえることは、それほどねがっても叶わないというようなことがらであったことと関係があるのではないかと、いまは思いを巡らすだけでる。

畢竟、ことばはそれを造った人々のもので、彼らの考えを表すものには違いない。そこ

に何らかの一貫した理論的筋を見出そうとすることは、無意味という見方もあろう。しかし、「六書の図」をみれば、たとえあれほど整った考えが造字の初めからあったとは言わないまでも、勝れて早熟であった中国の文化をみれば、われわれが一笑に付したり、一蹴するだけではない、筋だった六書説があったと思わずにはいられないのである。

主要参考文献

底本は経韻楼原刊本『説文解字注』（所謂段注 上海古籍出版社）、大徐本（徐鉉『説文解字』）・小徐本（徐鍇『説文解字繫傳』）、丁福保『説文解字詁林』、馮桂芬『段注攷正』、江沅『説文解字音韻表』（皇清経解続編所収）を適宜参考にした。

段玉裁 詩経小学 周禮漢讀考 毛詩故訓傳 六書音韻表

平凡社 中國古典文学大系 書経・詩経・易经・春秋左氏傳・孟子・淮南子・史記

頼惟勤 説文入門 説文会編 大修館書店 1983年

内藤湖南 爾雅の新研究 「内藤湖南全集 第七卷」筑摩書房 1970.2.25

もと『支那學 第二卷第一號、第二號』（大正10）年9、10月）

近藤光男 清朝考証学の研究 研文出版 1987年

大橋由美 文字学階梯（一）～（六）『新しい漢字漢文教育』大修館書店 2000～2004年

讀段注助辞（一）『二松学舎大学紀要』2008年など、一連の助辞研究論文（～（七）まで）